

Suzette M. LaRoche, Hiba Arif Haider 原著

吉野相英 訳

脳波で診る救命救急

意識障害を読み解くための脳波ガイドブック

河村 満

ハンス・ベルガーが初めて人の脳波記録に成功したのは1920年代で今からちょうど100年前のことであった(論文発表は1929年)。この成功の背景には、精神機能を測ることへの強い興味があった。ベルガーは脳波実用化の過程で、脳の温度や脳血流の測定にも力を注いだ。 α 波や β 波の命名もベルガーによる。

学生時代(1970年代)の実習で、脳波室の先生から脳波検査法の意味を習ったことを今でもよく覚えている。脳波測定の意義は2つで、1つは意識レベルがわかること、もう1つはてんかん診断ができること、と教わった。X線CTがようやく開発されたころであった。それから半世紀を経て脳波診断の意義は拡大し、神経救急診療の場面全般で大きな意義を持つようになった。これらの背景からNCSE(非けいれん性てんかん重積状態)が示され、最近では健忘・失語などてんかん性高次脳機能障害ともいえる病態が特に注目されている。

本書はICU脳波モニタリングの定番書である『Handbook of ICU EEG Monitoring』を吉野相英先生(防衛医大精神科学)が全編翻訳なさったものである。全40章に用語についての付録がついて、全体で456ページの大部である。各章には必ず脳波所見が掲載され、in this chapter, キーポイント, 予備知識, 基礎, 今後の課題, 付録図, 最後に文献が20~30編という構成で非常に豪華である。本書の目玉, 特筆すべき点はベルガーの時代には全く想像もできなかったに違いない長時間脳波モニタリングの基礎がわかりやすく示されていること、それに最

近何かと話題になる定量脳波の可能性についてきちんと書かれていることだと思う。

この出版にあたって書評を私に依頼くださったのは吉野先生ご自身であり、謹んでこの依頼をお引き受けすることにした。吉野先生とは以前日本てんかん学会のシンポジウムで講演者としてご一緒したことがある。2019年神戸での第53回てんかん学会学術集会シンポジウムで、シンポジウムのテーマは「認知症とてんかん」というものであった。2人の講演の共通テーマはNCSEであった。てんかん性の高次脳機能障害は以前考えられていた以上に高頻度に発症し、一見認知症にも見えるが実はその多くはNCSEであり、その脳波所見と臨床病態の把握が特に重要であるということがそのシンポジウムで総括された。このシンポジウムがきっかけの1つになり、私は吉野先生の前著(監訳)『精神神経症候群を読み解く——精神科学と神経学のアートとサイエンス』(2020年, 医学書院)の書評も書いた。こちらの本も素晴らしい本で翻訳もよい。

これらの本は、てんかん・意識障害などの神経救急診療現場で働く臨床家, また神経生理学研究の立場の基礎研究者にも有用で、脳波診療の行方を照らす灯の1つとなることは確実である。1人でも多くの人に読んでいただきたいと心から思う。

(奥沢病院名誉院長/昭和名誉教授・脳神経内科)

●B5 456頁 2023年

定価: 15,400円(本体14,000円+税10%)

医学書院刊